REPORT

「いつかは結婚したい」から婚活行動へ
―「第７回結婚・出産に関する調査」より ―

森 義博　生活設計研究部　主席研究員

要旨

１．恋愛・婚活・結婚に関する意識調査結果

■ 20 代前半の未婚男女は８割が結婚に前向き。結婚に対する気持ちは 30 代半ばに大きく変化し、30 代後半の男女の４割が結婚に後ろ向きに。

■ 20 代の結婚したい理由は「好きな人と暮らしたい」「子どもが欲しい」など。30 代になると「親を安心させたい」「老後の安心を得たい」などが増加。

■ 結婚を希望する年齢は、４年前の調査に比べ早まる。震災の影響もあるか。

■ 女性が結婚相手に求める最低年収は、実態に照らしほぼ現実的な水準。

■ 未婚の 30 代で婚活経験がある割合は男性３割、女性５割。婚活しない理由は、20 代の「自然な出会いを待ちたい」から 30 代の「結婚に興味なし」へ。

■ 婚活経験のある既婚者が婚活を始めた一番のきっかけは「結婚する年齢を意識したから」。４割が、婚活が実際の結婚につながったと認識。

２．潜在する結婚志向を顕在化させるために

■ いずれは結婚したいと思っていても、具体的な行動に結びついていない若者は多い。潜在している結婚志向の顕在化が必要。

■ 新しい出会いのスタイルも増えているが、現在トップの「職場結婚」は今後も重要と考えられ、結婚志向の顕在化に企業にも役割発揮を期待したい。

調査の特徴と本稿

当研究所では本年２月、全国の 20 代から 40 代の男女 3,616 名を対象にインターネット調査を実施した。表題には「結婚・出産に関する調査」と謳っているが、実際には、恋愛から婚活、結婚、出産、子育てまで、結婚を中心とした前後のライフステージに関する質問を設けた調査である。結婚･出産をテーマとした調査は今回が７回目であるが、過去の調査結果との経年比較は主眼とせず、現在の少子化問題の根が浮き彫りになるポイントに焦点を絞って、実態や意識を明らかにすることを目的としている。

本稿では今回の調査結果のうち、未婚の男女が恋愛・婚活を経て結婚に至るまでの部分から特徴的な点をご紹介するとともに、そこから見えてくる課題を考察したい。

Ⅰ　結婚

1. 結婚に対する考え方

（１）結婚したいか

非婚化・晩婚化が進む現代であるが、「結婚したい」という漠然とした気持ちは多くの人が持っていると言われる。今回の調査でも、それを確認することができた（図表１）。

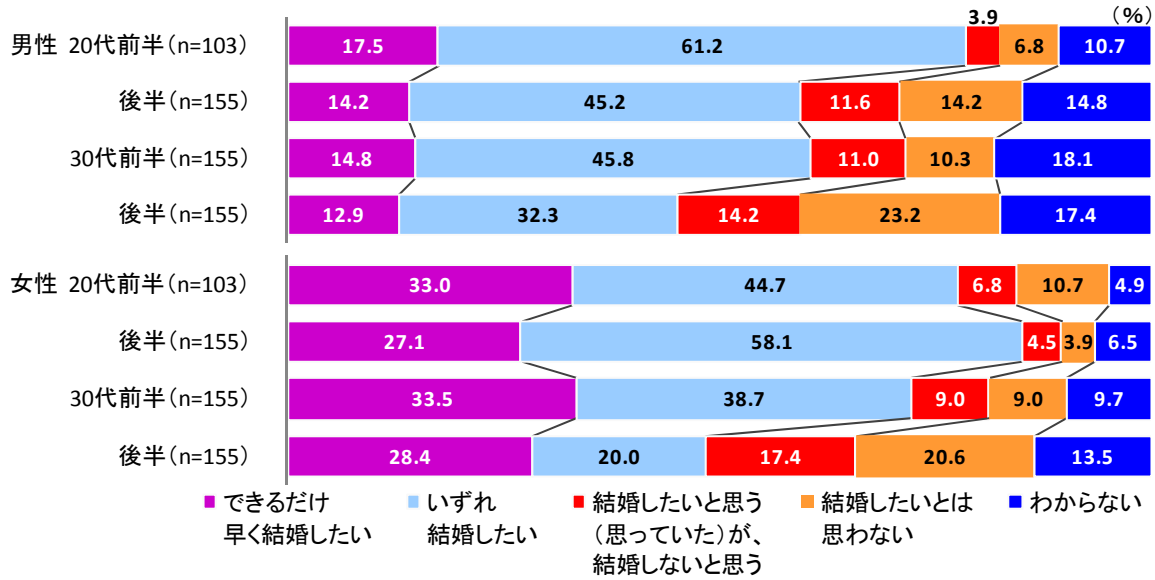
「できるだけ早く結婚したい」または「いずれ結婚したい」と回答した人を“結婚前向き派”とすると、20 代前半は男女とも８割近く（男性 78.7%、女性 77.7%）が“結婚前向き派”である。ただし、８割の内訳には男女差があり、「できるだけ早く」と現実問題に近く捉えている割合は、女性が男性の２倍近い。このように、20 代前半の結婚志向は全体としては高いと言えるが、一方で「結婚したいとは思わない」と結婚を全面否定している女性が１割（10.7%）いる事実も、けっして見落とすわけにはいかない。

図表１では、結婚した人は分母から外れていくので、年齢層が上がって既婚率が高くなれば、“結婚後ろ向き派”の割合がある程度大きくなるのは自然と考えられる。しかし、まだまだ未婚率が高い 20 代後半の男性で、早くも“結婚前向き派”が６割にダウンしている点は非常に気になる。社会人になって数年経った男性の中には、結婚の優先順位が低い人も少なくないようだ。

気になる点をもう一つ挙げれば、「いずれ結婚したい」というあまり積極性の感じられない回答が、30 代前半では、男性もさることながら、女性でも４割近くいる点である。

そして、30 代後半になると、男女とも未婚者の４割弱が「結婚しないと思う」あるいは「結婚したいとは思わない」と、結婚に後ろ向きになる。

図表１　結婚に対する気持ち（未婚者）



コーホート分析ではないので今回の結果から断言はできないが、30 代前半に「いずれ結婚したい」と思っていた女性のかなりの割合が、30 代後半になると“結婚後ろ向き派”に転じてしまうと見られる。

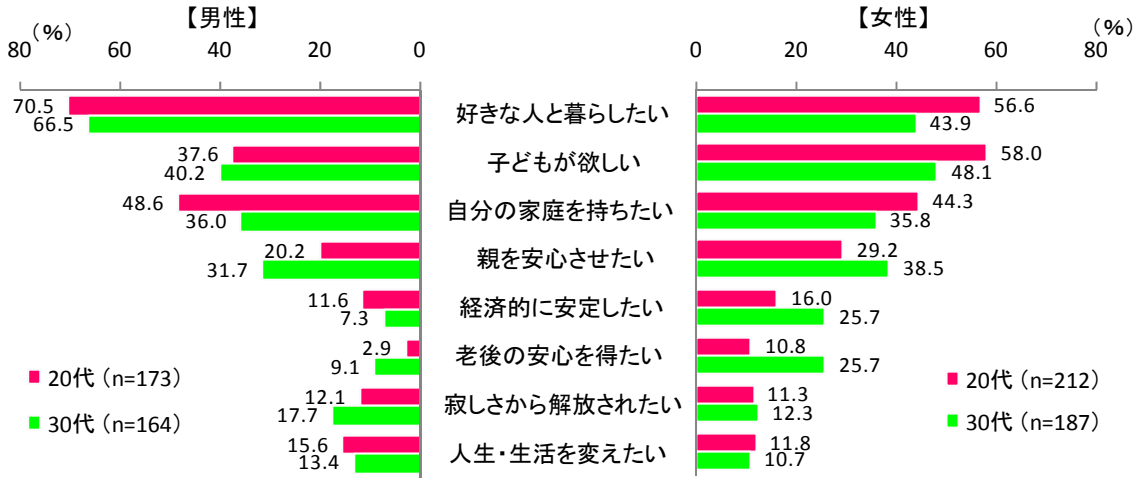
（２）結婚したい理由

“結婚前向き派”が結婚したいと思う理由は 20 代・30 代とも、男性は「好きな人と暮らしたい」、女性は「子どもが欲しい」が最多だった（図表２）。

理由には年齢による変化が見られ、30 代になると「親を安心させたい」を挙げる割合が男女ともに高まる。特に女性の場合、選択率は４割近く（38.5%）に上り第３位であり、結婚して親を安心させることが、女性の意識の中で優先順位が高いことがわかった。

女性ではさらに、30 代では「経済的に安定したい」と「老後の安心を得たい」が顕著に増加している。これらには、結婚することによって将来の不安が和らぐことを期待するという共通点がある。また、「老後の安心を得たい」には、ひとり暮らしの寂しさや不安から解放されたいという面と、経済的な安心を得たいというふたつの側面があると考えられる。この項目は男女とも 30 代に上昇するが、老後の収入に不安を抱える可能性がより高い女性の数値が男性を上回っている。

図表２　結婚したい理由（図表１で「できるだけ早く結婚したい」「いずれ結婚したい」と回答した人。３つ以内の複数回答）



（３）結婚したくない理由

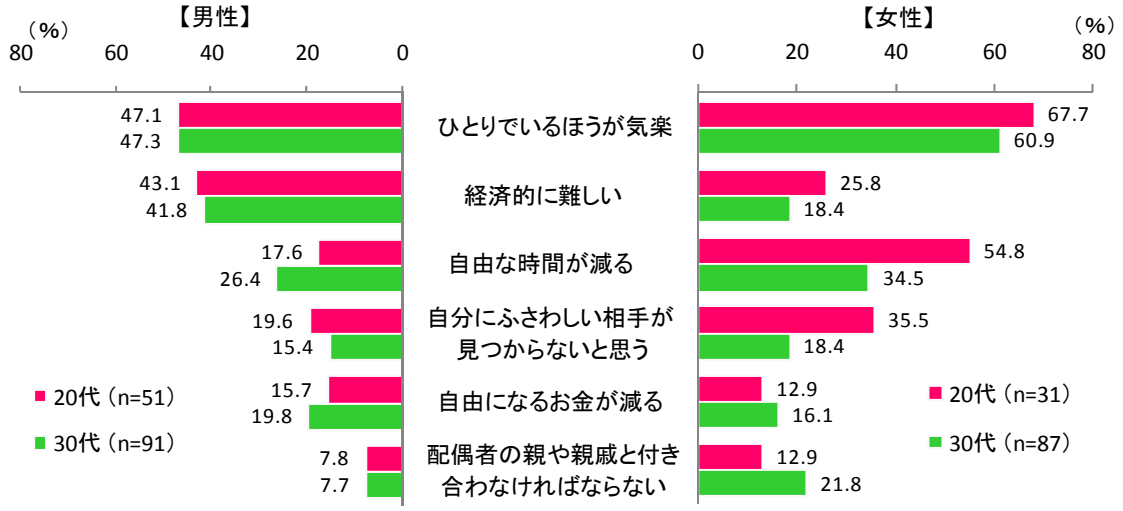
結婚したくない、あるいは結婚しないと思っている人は、その理由として「ひとりでいるほうが気楽」を挙げる人が男女とも最も多い（図表３）。

前出の“結婚したい”理由は項目毎の男女差がそれほど大きくなかったのに比べ、“結婚したくない（しないと思う）”理由には男女で著しく異なる項目が見られる。男性では「経済的に難しい」が４割を超えており、必ずしも積極的に非婚を選択しているわけではない男性が相当数いることがうかがえる。「自由な時間が減る」が第２位の女性とは対

照的である。

当調査では未婚者全員に「現在独身でいる理由」を質問しているが、男性のトップは「家族を養うほどの収入がない」（20 代 44.6%、30 代 41.0%）であった。ちなみに女性のトップは「結婚したいと思える相手がいない」（20 代 41.9%、30 代 51.6%）である（図表は割愛）。

図表３　結婚したくない（しないと思う）理由（図表１で「結婚したいとは思わない」「結婚したいと思う（思っていた）が結婚しないと思う」と回答した人。３つ以内の複数回答）



2. 結婚希望年齢

20 代の“結婚前向き派”に「何歳頃に結婚したいか」を尋ねたところ、男性の場合、20 代前半の３割（29.0%）、20 代後半の４割（40.3%）、女性では 20 代後半の３割（31.5%）が節目の「30 歳」と回答した。一方、20 代前半の女性にとっては、「25 歳」（29.2%）が大きな節目になっていることがわかった（図表４）。

４年前（2009 年）の当社調査と比較すると、より現在に近い年齢を挙げる人が増えている。

20 代前半の男性の場合、09 年調査では「30 歳」を挙げる人が４割（38.2%）を占めていたが、今回は３割（29.0%）に減少。一方で、一つ手前の節目の「25 歳」や、30 歳の大台まで少し余裕のある「28 歳」など、20 代へのシフト傾向が見られた。

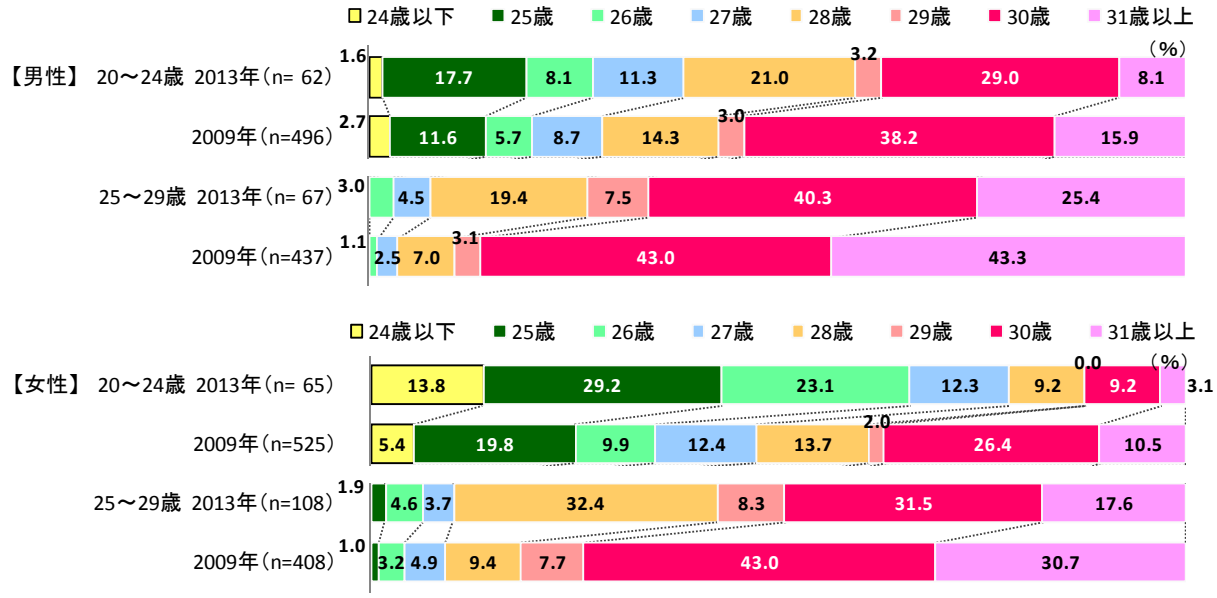
また 20 代後半の男性では、09 年は４割以上（43.3%）の回答が 30 歳を超えていたが、13 年には 30 歳を超えた回答は 25.4%にすぎず、４人中３人は「30 歳までに」結婚したいとしている。

女性も男性と同様の傾向だが、変化の度合いはより強く見られた。20 代前半の女性の場合、09 年の調査時には「30 歳」が最も大きな節目（26.4%）だったが、今回の調査では「25 歳」がトップ（29.2%）で、20 代のうちに結婚したいと希望する人で９割近く

（87.7%）を占めた。20 代後半の女性では、09 年の調査時には節目の「30 歳」が圧倒的（43.0%）だったが、今回は「30 歳」（31.5%）よりも、大台前の「28 歳」（32.4%）を望む人のほうが多く、「30 歳まで」を合計すると、09 年の 7 割（69.2%）から 8 割強（82.4%）に増えている。

震災を経験し、人と人とのつながりを求める傾向が強まったと言われるが、今回の調査からも、パートナーを早く持ちたいという気持ちが見てとれる。晩婚化に少しでもブレーキをかける力となっていくか、平均初婚年齢の今後の変化に注目したい。

図表４　結婚を希望する年齢（図表１で「できるだけ早く結婚したい」「いずれ結婚したい」と回答した人）



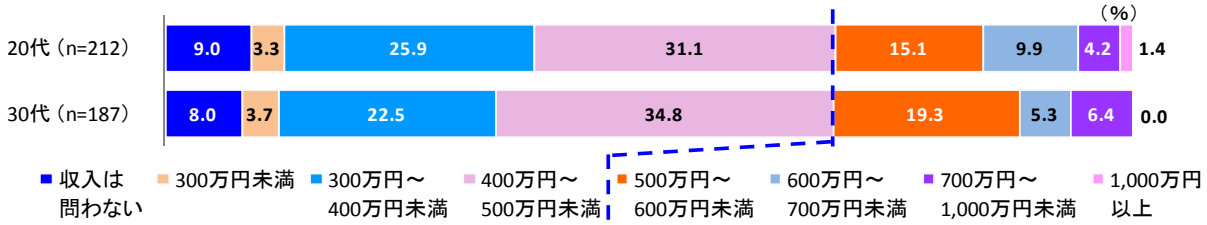
３. 結婚相手に求める年収

既述のように、結婚に対しネガティブな男性の４割以上が、経済的に難しい点をその理由に挙げている。それでは、女性は男性にどれだけの年収を求めているのだろうか。希望する年収では必ずしも条件と言える数値が求められないので、明確に「最低年収」を尋ねた。

まず、１割弱の女性が「収入は問わない」と回答した。これに「300 万円未満」「300 万円以上 400 万円未満」「400 万円以上 500 万円未満」までを加えると、20 代・30 代ともほぼ７割に達した（20 代 69.3%、30 代 69.0%）（図表５）。

男性サラリーマンの平均年収は、20 代前半が 262 万円、同後半 367 万円、30 代は前半が 434 万円、後半が 498 万円という調査結果がある（国税庁「平成 23 年分民間給与実態調査結果」）。女性が考える最低ラインは、ある程度現実的な水準と言えるのではないだろうか。

図表５　未婚の女性が結婚相手に求める年収（図表１で「できるだけ早く結婚したい」「いずれ結婚したい」と回答した女性）



Ⅱ　異性との交際

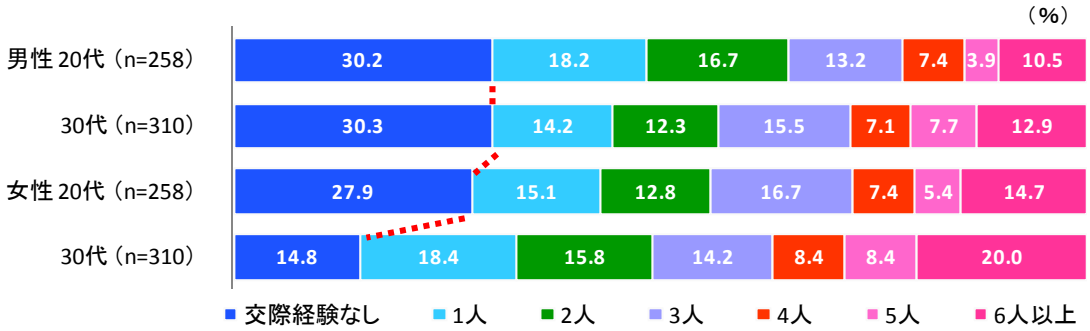
1. 交際経験の有無

ここまで見てきたとおり、20 代・30 代の結婚に対する気持ちには前向きな要素が少なくないことがわかった。しかし、実際に結婚に至るには、その前に出会いや恋愛といったプロセスが欠かせない。

ところが、今回の調査によると、未婚男性は 20 代・30 代とも３割に異性との交際経験がないことがわかった（図表６）。20 代から 30 代になると、交際経験のある人の交際人数は増えていくが、交際未経験者の割合は３割のまま変化していないのである。

一方、女性の場合、20 代では３割弱が交際未経験だが、30 代ではその割合は半減している。また交際した人数は相対的に女性のほうが多めという傾向も見られる。ちなみに、３人以上の異性と交際した人の割合は、20 代の男性が 34.9%なのに対し、20 代女性は 44.2%だった。

図表６　異性との交際経験（未婚者）

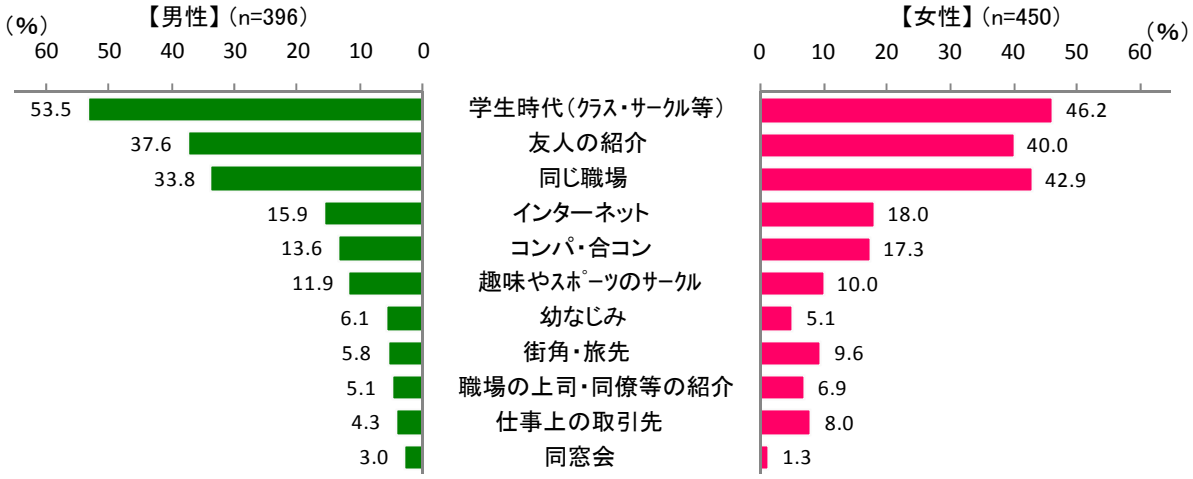


2. 恋人との出会い方

それでは、異性とはどのように出会っているのだろうか。20 代・30 代の交際経験がある人に、恋人との出会い方を尋ねたところ、学生時代のクラスやサークル等で知り合ったと回答した人が男女ともトップだった（男性 53.5%、女性 46.2%）（図表７）。さらに、

「友人の紹介」「同じ職場」を加えた３つが、恋人との主な出会いのパターンと言える。女性の場合、この３パターンがいずれも４割程度で大きな差がないのに対し、男性では学生時代が突出しているという特徴が見られた。

図表７　恋人との出会い方（異性との交際経験のある 20 代・30 代の未婚者。複数回答）



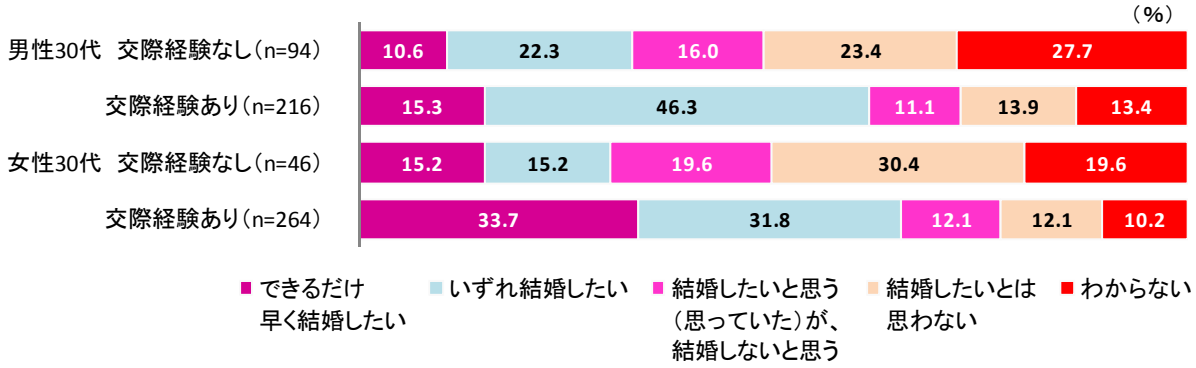
３. 交際経験と結婚志向

ここで、交際経験の有無と結婚に対する考え方の関係を見ておきたい。図表８は、結婚したいかどうかを問う質問に対する 30 代の未婚男女の回答を、交際経験のある人とない人に分けて示したものである。

回答結果には交際経験の有無による明らかな差が見られ、交際経験がない人の場合、“結婚後ろ向き派”の割合が男性では４割（39.4%）、女性では半数（50.0%）に達している。さらに、男性の 27.7%、女性の 19.6%が「わからない」と回答している。結婚に対する自分の気持ちが「わからない」という回答は、結婚に対して前向きな気持ちを持っているとは考えにくく、これを含めると、交際経験のない 30 代男女のうち結婚にネガティブな人が７割近く（男性 67.1%、女性 69.6%）を占めていることになる。

異性との交際経験がない理由は、本人に起因するもの、環境に起因するものとさまざまに考えられるが（今回はそこまでは質問していない）、若者を結婚に導くには、異性との交際経験が大切なポイントであることがわかる。出会いの場づくり、交際を主に精神的に後押しするしかけづくりを行い、まずは異性との交際を経験してもらうことが、少子化対策への第一歩だと言うことはできよう。

図表８　交際経験の有無別の結婚志向（30 代の未婚者）



Ⅲ　婚活

１．婚活の経験

（１）婚活経験の有無

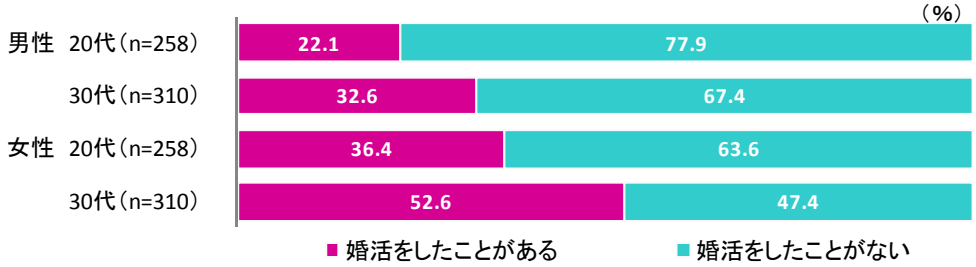
昨今さまざまな分野で「〇活」という単語が使われているが、その中でも「婚活」は「就活」と並んで、一般にかなり浸透している言葉である。

「婚活」に明確な定義はないが、今回の調査では、「結婚のために利用したり行ったりしたもの」を「婚活」と呼ぶこととした。婚活パーティーやお見合い、インターネットの婚活サイトへの登録、合コンなどに加え、友人や親・上司などに異性の紹介をお願いすることなど、やや広めに「婚活」を例示し、現在までの経験を尋ねた。

結果は図表９のとおりである。男女とも20代よりも30代のほうが経験率は高かった。蛇足ながら、このグラフは未婚者を分母としているため、既婚者が増える 30 代のほうが経験率が低くなる可能性も考えられたが、そのような現象は見られなかった。

ただ、30 代の未婚男性の約３人中２人（67.4%）、未婚女性の半数近く（47.4%）が結婚に向けた行動を全くとったことがない実態は、少子化問題を考える上で、多少なりとも重く捉える必要があるのではないだろうか。

図表９　婚活の経験（未婚者）

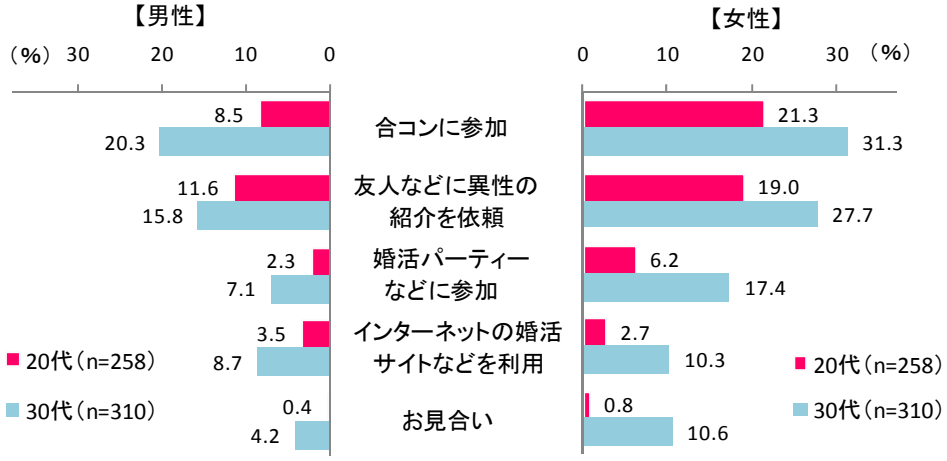


（２）経験した婚活の内容

経験した婚活は、「合コンに参加」と「友人などに異性の紹介を依頼」が上位である。

図表 10 のとおり、どの項目も 20 代より 30 代のほうが経験率が高かった。また、殆どの項目において女性の経験率が男性を上回ったが、唯一 20 代の「インターネットの婚活サイト」の利用率のみが例外だった。直接異性と会うことを必要とせず、また一定程度は匿名での利用も可能である点が好まれた結果かもしれない。

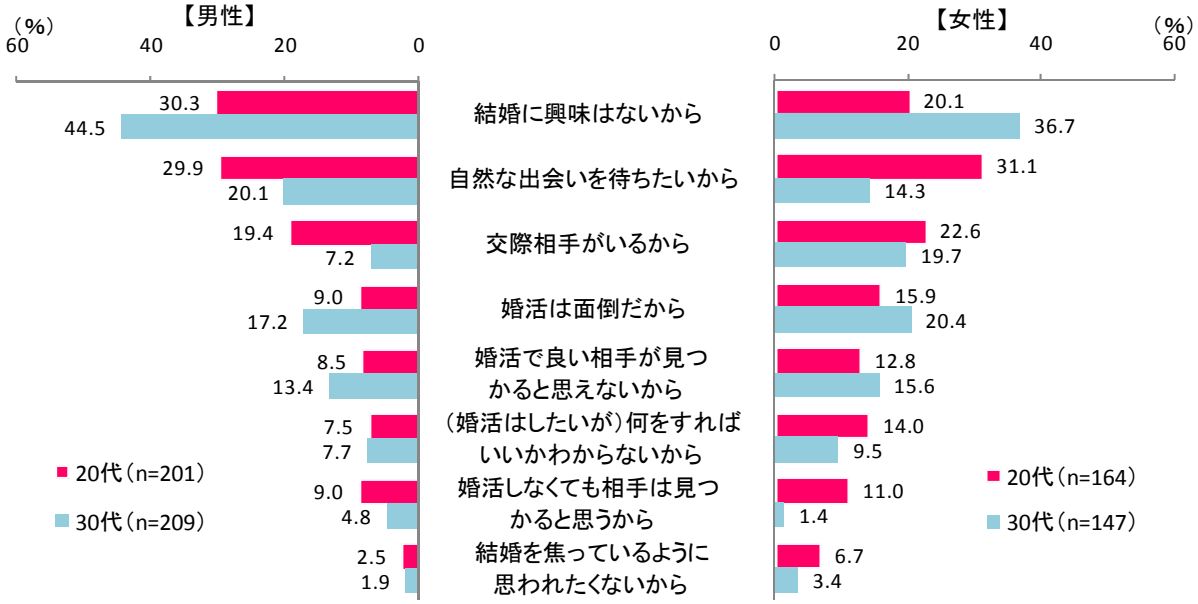
図表10　経験した婚活の内容（未婚者。分母には婚活未経験者を含む。複数回答）



（３）婚活をしない理由

図表 9 で示したように、未婚男性のうち 20 代の 77.9%、30 代の 67.4%、女性では 20 代の 63.6%、30 代の 47.4%に婚活経験がないが、婚活をしない理由には、20 代と 30 代に大きな違いが見られた（図表 11）。

図表11　婚活をしない理由（婚活経験のない未婚者。複数回答）



男女とも「結婚に興味はないから」が 30 代で急増し、突出した数値（30 代男性 44.5%、同女性 36.7%）を呈している。逆に「自然な出会いを待ちたいから」は 30 代で大きく低下している（男性では 20 代 29.9%、30 代 20.1%。女性は 20 代 31.1%、30 代 14.3%）。20 代のうちは自然な出会いを漠然と待っていたが、30 歳を過ぎて結婚そのものに興味が薄れてしまった、という変化をたどる人が多いことが想像される。

２. 既婚者の婚活経験と結婚

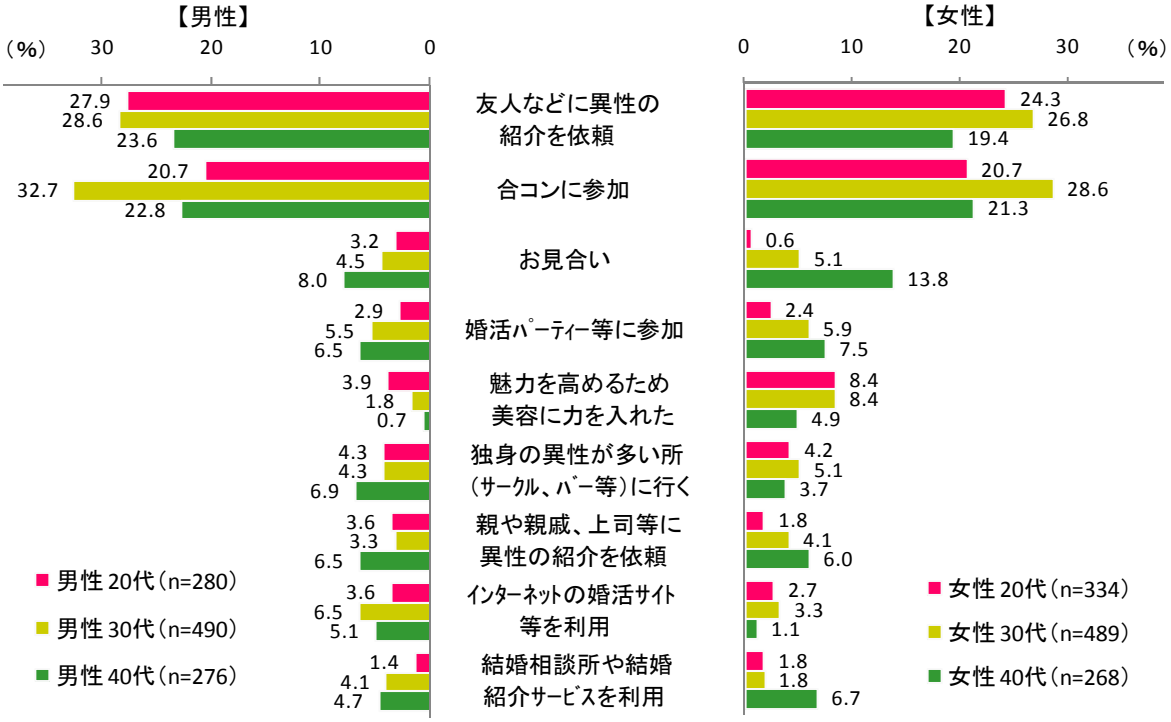
（１）既婚者の婚活経験

既婚者にも結婚前の婚活経験を尋ねたところ、半数近くに経験があった（図表は割愛）。

その内容は図表 12 のとおり、「友人などに異性の紹介を依頼」と「合コンに参加」が中心だった。なお、年齢区分は現在（回答時）の年齢である。したがって例えば、現在 30 代の既婚男性の 32.7%が、結婚前に合コンに参加した経験がある、という意味になる。

全体の中では少数派ながら、40 代になると「お見合い」「婚活パーティー」「親・親戚・上司などに紹介を依頼」「結婚相談所や結婚紹介サービス」を経験した人の割合が高くなっている。40 代の既婚女性のうち「お見合い」を 13.8%、「結婚相談所や結婚紹介サービス」を 6.7%が経験している。これらは 30 代以下の経験率が相対的にかなり低いことから、比較的高い年齢の女性がお見合いや結婚相談所等を利用することで結婚に至ったケースが一定程度存在することがわかる。

図表12　既婚者が経験した婚活の内容（複数回答。分母には婚活未経験者を含む）

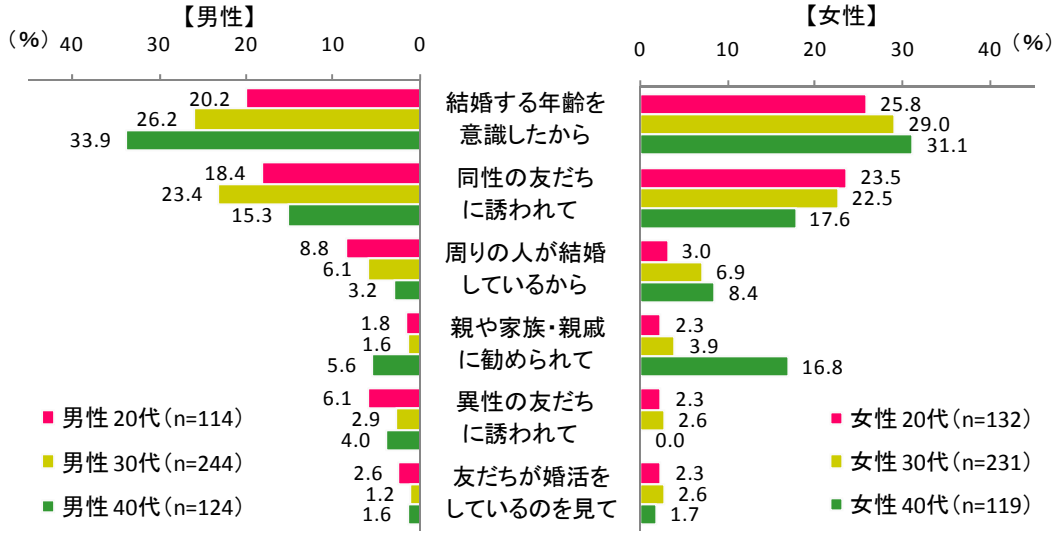


（２）婚活を始めたきっかけ

婚活経験のある既婚者に婚活を始めたきっかけを尋ねたところ、男女とも「結婚する年齢を意識したから」がトップだった（図表 13）。20 代から 40 代までどの年齢層をとっても、結婚年齢を意識して婚活を始めた人が最も多い点は共通している（図表 13 の年齢区分が現年齢である点は図表 12 と同様）。

男女とも 40 代になると親や家族などに勧められて始めた人が増えており、特に女性の場合に顕著である。

図表13　婚活を始めた一番のきっかけ（婚活経験のある既婚者）



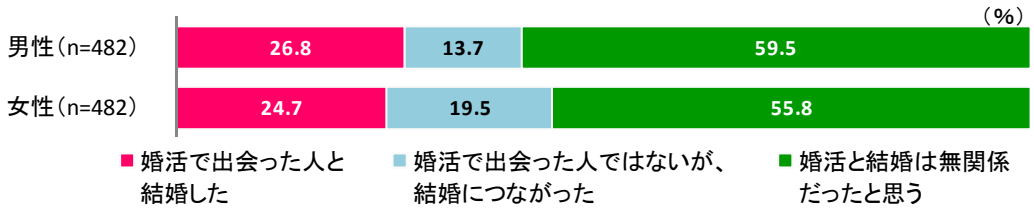
（３）婚活と結婚の関係

ところで、婚活は現実の結婚につながったのであろうか。

図表 14 のとおり、婚活経験のある既婚者の４人に１人（男性 26.8%、女性 24.7%）が、婚活で出会った人と結婚している。さらに、「婚活で出会った人ではないが、結婚につながった」と回答した人も含めると、婚活経験のある人の４割以上が、婚活が実際の結婚に何らかの効果をもたらしたと認識していることになる。

結婚を意識して具体的な行動を起こすことが、結婚に向けたステップになることを、この調査から確認することができた。

図表14　婚活は現実の結婚につながったか（婚活経験のある既婚者）



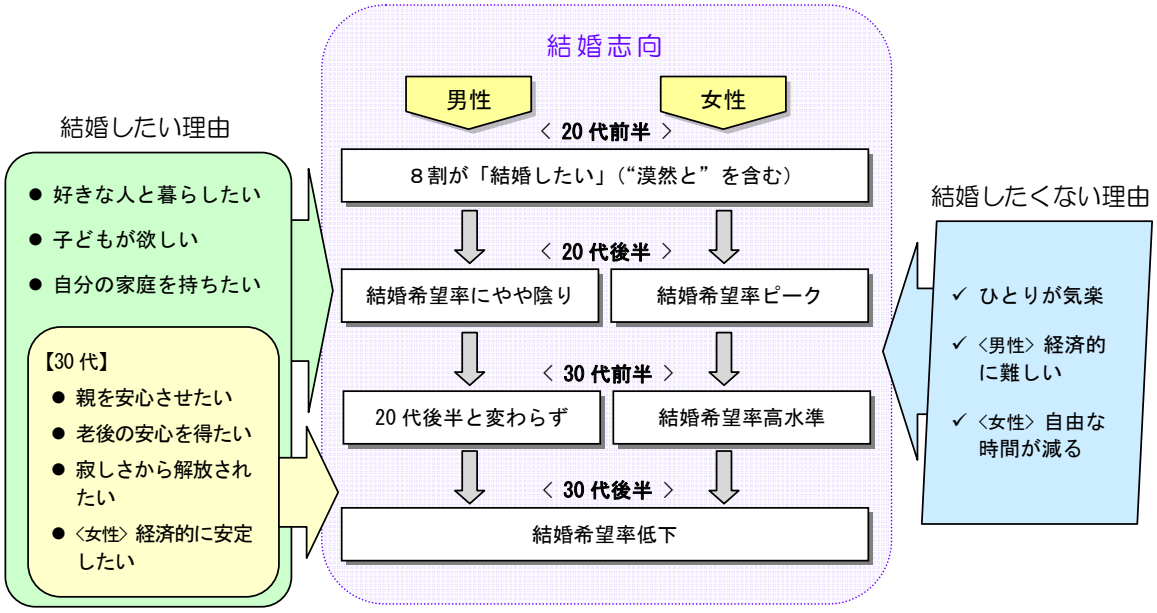
Ⅳ　調査結果から見えるもの ―潜在する結婚志向を顕在化させるために―

1. 顕在化しない結婚志向

今回の調査結果から見えてくる課題点を整理してみたい。

まず、今回の調査結果に表れた結婚に対する考え方の年齢による変化を、簡単な図で表してみた（図表 15）。図式化によって多くの選択肢が切り捨てられ、ステレオタイプ的な表現になってしまう難点はあるが、少子化問題を考える上で重要となるポイントを整理するために、あえて試みた。

図表15　結婚志向の年齢による変化（20 代前半～30 代後半。まとめ図）



20 代前半の段階では、男女とも８割が結婚に前向きである。ただし、「いずれ」という漠然とした気持ちの人、言うなれば“潜在的な結婚予備軍”が多い（一方で、完全否定の女性が１割いることは既述のとおり）。

20 代後半から 30 代前半は、結婚前向き派の割合には男女差が見られるが、前向き派の中で“潜在的‥”が過半を占める点は男女に共通している。その後、男女とも 30 代後半になると、未婚者に占める結婚前向き派の割合は目立って低下することになる。

結婚前向き派が多い 30 代前半までに、潜在的な結婚意欲を顕在化させることができれば、具体的に結婚に向かう人は増えることになるだろう。

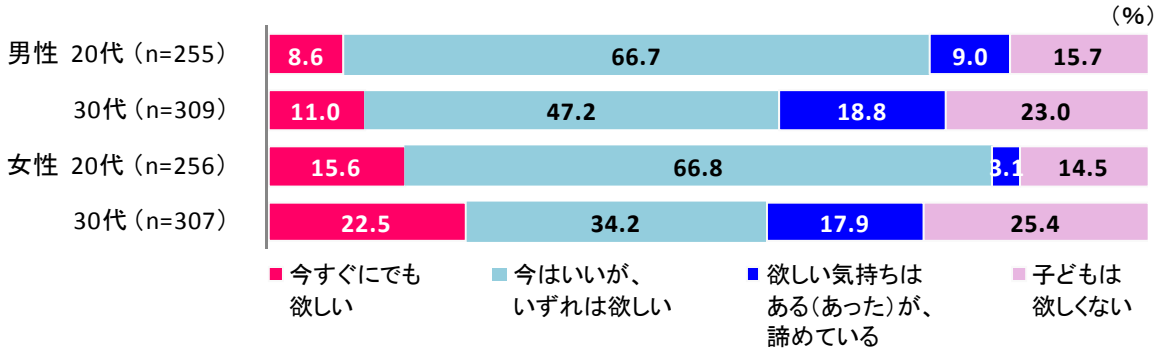
それでは、顕在化させるために必要なものは何か。それを探るために、結婚したい理由に注目してみたい。30 代になると「親を安心させたい」や将来の不安解消といった、具体的な生活設計に関わる事柄、しかも先延ばしにしにくいものを多くの人が挙げるよ

うになるが、20 代に多く見られる回答の中で年齢（時期）が関係するものは、「子どもが欲しい」が主である。

今回の調査では、子どもが欲しいかどうかを尋ねているが、未婚者の意識には年代で大きな違いが見られた（図表 16）。「欲しい」と回答した割合が 20 代では８割前後（男性 75.3%、女性 82.4%）であるのに対し、30 代では男女とも６割を切っている（男性 58.2%、女性 56.7%）。しかも、男女とも２割近く（男性 18.8%、女性 17.9%）が「欲しい気持ちはある（あった）が諦めている」のである。

子どもが欲しいからいずれは結婚したいと漠然と思っていたが、具体化しないでいるうちに年を重ねてしまい、「子どもは無理かな」と思うようになり、結婚意欲も薄れてしまう、というルートをたどる人も少なくないと考えられる。勿論その間には、仕事など他の重要な要素が絡んでくる場合も多いだろうが、「子どもが欲しい」だけでは結婚の優先順位は高まらず、結婚志向が十分に顕在化しなかったと想像される。

図表16　子どもを欲しいと思うか（未婚者）



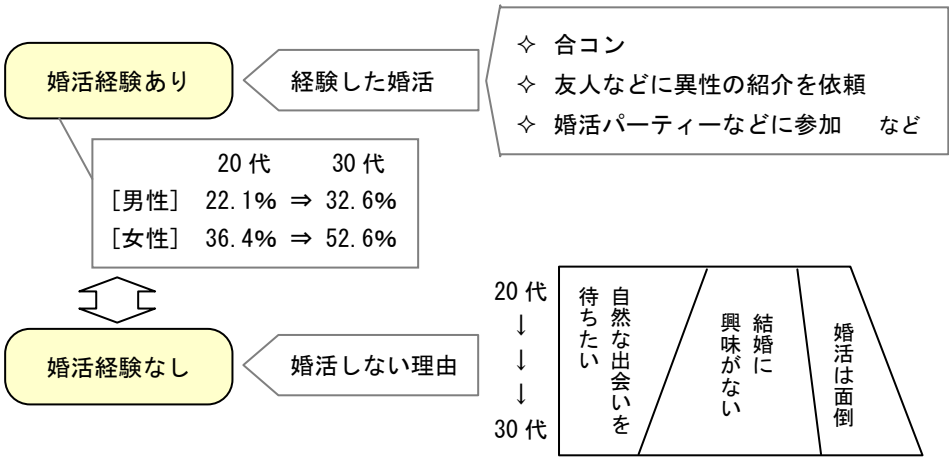
2. 結婚志向顕在化のしかけ

わが国の少子化の要因は大きく晩婚化・非婚化と、夫婦の出産数の減少の２つに分けられるが、中でも晩婚化・非婚化の要素が大きいと言われる。

現在わが国で少子化対策として進められている育児休業制度の整備や保育施設の充実、ワーク・ライフ・バランスの推進は、両方の要素に対応しており、「子どもが欲しいから結婚したい」人にとっての障害を取り除く効果が期待できる点で、今回の調査結果と方向性は合致している。しかし、それだけでは、結婚志向を顕在化させるところまでは難しいだろう。

既に述べたとおり、結婚に向けた具体的な行動経験（婚活経験）のある人は、30 代男性の３人に１人、30 代女性でも半数にすぎず、婚活しない理由も「自然な出会いを待ちたい」と思っているうちに「結婚に興味がない」に変化してしまう、という構図が見えている（図表 17）。阻害要素の除去に加えて、婚活行動に向けて背中を押すしかけづくりが重要だと考えられる。

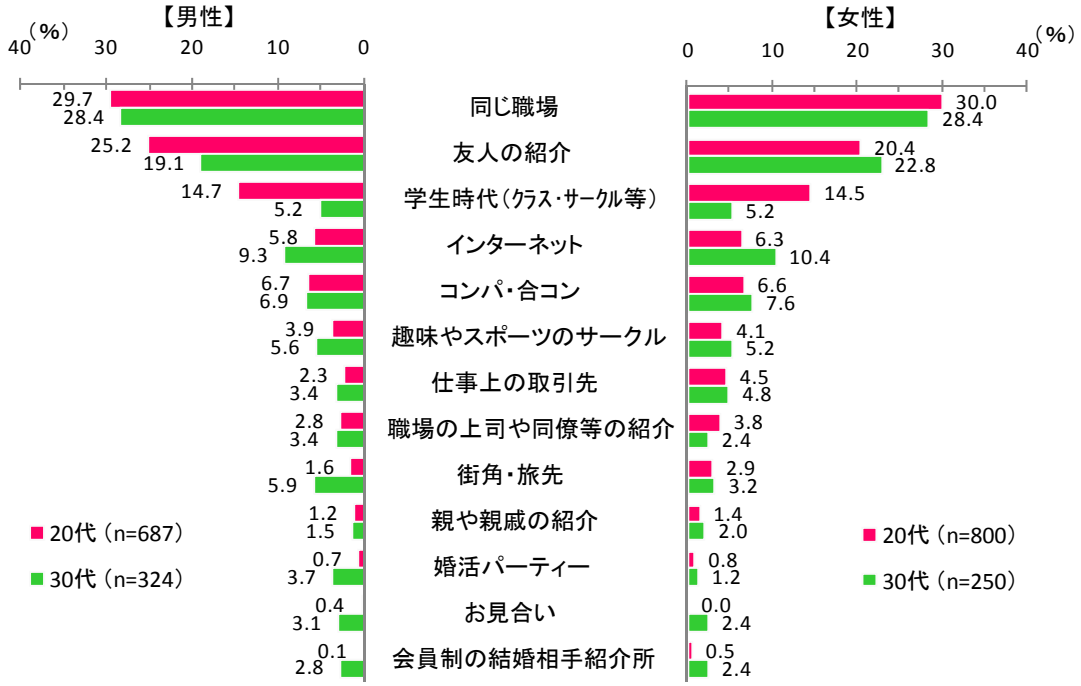
図表17　婚活の実態（まとめ図）



多くの自治体が、結婚相談や婚活イベントの開催、インターネットでの結婚関連情報の提供など、婚活支援事業を行っている。婚活関連事業者や民間の婚活サイトも多い。かつてお見合い相手を世話してくれた人縁ネットワークに代わる社会インフラは、かなり充実してきたとは言えそうである。

図表 18 は、既婚者に配偶者と知り合ったきっかけを尋ねた結果である。30 代は男女とも 1 割（男性 9.3%、女性 10.4%）が「インターネット」と回答している。インターネット調査であることを割り引いて評価する必要はあるものの、インターネットによる結婚相手探しが、既にある程度市民権を得ていると言うことはできよう。

図表18　結婚相手と知り合ったきっかけ（既婚者）



「お見合い結婚」が極めて少ないことは、図表 18 からも確認できるが、もう一つの伝統的なスタイルである「職場結婚」は、男女とも約３割を占めてトップである（男性：20 代 29.7%、30 代 28.4%。女性：20 代 30.0%、30 代 28.4%）。ちなみに、国立社会保障・人口問題研究所の「第 14 回出生動向基本調査」（2010 年）でも、夫婦の出会いが「職場や仕事」だった割合は 29.3%で、1987 年の調査で「お見合い」に代わってトップになって以来１位を守っており（1987 年 31.5%、1997 年 33.5%、2005 年 29.9%）、職場が結婚相手の供給源として大きな役割を果たしてきたことがわかる。

出会いを積極的に求める必要がなく、お互いに相手を理解しやすい職場は、今後も重要な出会いの場であり続けるにちがいない。職場においては、同じ部署や仕事上の直接のつながりに加え、フェイスブックなど SNS を利用した社員自身による出会いの場づくりも可能ではあるものの、企業がサポートできる場面も少なくないと考える。かつてのような法定外福利費や強制的な社員拠出金を使った全員参加型の社内レクリエーションは現状にそぐわないとしても、社内での出会いに趣旨を絞ったものであれば、コンセンサスが得られる可能性もあろう。また、イベントに拘らず、社内の情報インフラを活用した情報提供も有効と考えられる。

企業にできる少子化対策は、出産・育児へのサポートだけにとどまらない。その前段階の出会い・結婚にまで踏み込むことが望まれるのではないだろうか。

【調査の概要】

調査対象： 全国の 20 歳以上 49 歳以下の男女（株式会社マクロミルの登録モニター）
調査方法： インターネット調査
調査時期： 2013 年 2 月 6 日～2 月 9 日
有効回答： 3,616 名